

中嶋康博詩集

1961—
Yasuhiro Nakashima

東 京
潮 流 社 版

詩集
目次

I 夏帽子（一九八八年刊）より

序の歌	11
金星	12
火の山のはで	14
情事	16
街道	17
春のをはりに	18
Marchen	20
野菜	22
川原	23
晴夜	24
決闘	26
終着駅	27
海の家	28
てんたうむし	29
音楽	30
夏帽子	31
夏休みの宿題	32
樹海	33
昼寝	34
喪章	36
双眼鏡	37
そいつは	38
偶得	39
秋夜	40
星座	41
恐山	42

対座	83	古心	82	雲根	80	晩秋	78	冬の調べ	76	陽だまり	74	森のなかで	72	一枚の紙片を：	71	季節	70	夏の終り	68	溪流	66	高原スケッチ	64	雲の羊飼	63	詩人の夢	60	噴水	58	山上の祠	56	讃歌	54	朝風	52	春の山田で	51	II 蒸気雲（一九九三年刊）より		首途	48	水源	47	暗夜	46	泉水のほとりで	45	脱皮	44	怪談	43
----	----	----	----	----	----	----	----	------	----	------	----	-------	----	---------	----	----	----	------	----	----	----	--------	----	------	----	------	----	----	----	------	----	----	----	----	----	-------	----	------------------	--	----	----	----	----	----	----	---------	----	----	----	----	----

あとがき	124
山霧の記	120
歳時記 III	118
神話	117
伊吹山	116
山水画	115
松籟に	114
山頂にて	112
初秋	110
高原台上にて	108
河口にて	106
晩夏の高原で	104
歳時記 II	102
夜明け前	100
獵師と熊のはなし	98
山麓	96
登降	94
歳時記 I	90
III 雲のある視野	
時間	88
卒業	86
寒風	84

I
夏帽子（一九八八年刊）より



『詩集 夏帽子』書誌

1988年12月28日 七月堂（東京）刊
53p 18×15cm 並製 200部印刷

序の歌

道ゆく誰も見かけないこの道を
いったい誰が拓^{ひら}いていったことだらう
すすきの穂を折り僕もまた歩いてゆく
羽の破れた蛾が弱々しくとぶ真昼に
これはどうやらふるさとへ帰る道？
行く手にあらはれる見おぼえない電灯
多くの旅人はここを夜とほったのだ

金星

夕暮れ

噴水がとまった

群れ集まった雲たちが

美しい鯉のやうに動きまはってゐる

そのあひだに

あれは身におびた金色を厭ふてゐるのだらうか

回想にまたたき

予言として最初に墮ちる星がひとつ

昔の勲章のやうに輝いてゐた

一日を歌ひつくした水盤が

あふれることもなく映してゐた

それをながめる僕の心の黄道にも

静かにけがれなく灯された黄水晶ツトリンのひとつづく

僕はかがやくあの星につづいて

とほい こはれた街のむかふへ沈んでゆくことはできない

II 蒸気雲（一九九三年刊）より

GEDICHTE



『詩集 蒸気雲』書誌

1993年 8月 22日 山の手紙社（岐阜）刊

57p 18×15cm 並製 200部印刷

春の山田で

山田の小径に蛙が一疋死んでゐる
私が助けてやったのだ

石垣の間からちっと私を見つめる視線
私はいったい何をしたのだらうか

燦々とふる春の陽に暖まって

蛙も 蛇も 私も みなひとりぼっちだ

讃歌

小高い山頂の青空をえらんで

大きな鳥が孤独な輪をとちて歌ふやうに

最愛の風よ

ほろび去る全てのものに

ふいて知らせる金色の予感よ

翼ある精神の かるやかな決意を

双手をひろげ 私も小さな鳩胸の心にはらんだのだが

それはほの暗い瀬気の高みへと私を誘ふ

火の山のはかない蒸気雲であったのか

ゆくてに仰ぐ 露岩のかげから湧き昇っては

鳳凰の貌かたちをして 刻々と翼をひろげた

伝説のやうに 鷹揚にはばたきながら

それはすみれ色の天上へ あざやかに消えた

新緑の大きにやすらふ 六月の神々よ

答へてほしい 人生の最愛の風にふかれて

私は今 登りつめた山頂に立ってゐる

たち眩らむ予感に ひとり呼吸をととのへながら

石の祠に手をかけて 私の歓喜は 頭上をめぐる

鳳凰の軌跡おぼとりをなぞるばかりだ

III
雲のある視野

登降

山の明るんだ天末線のすぐ下のしげみに

夜露にぬれてぼくらの残してきた焚火の痕跡が

一寸と軽蔑して眺められる位の高さまで登ってきたとき

朝一番の下山者がひとり ぶりこのやうにゆれながら

傍らをゆきすぎていった

ハイマツの香りを吹きながす山頂は

森林限界を越えたぼくらを 険しい笑顔で迎へ入れてくれたが

深い森の中へと消えていった彼の行く手には

日差しを今しがた浴びたばかりの もうひとつ低い

なだらかな丘のやうな火山が煙をふいて休息してゐた

猟師と熊のはなし

岩を攀ぢ、山笹の根をふみ、

がんこうらの実を食べに稜線までやってきたとき、

お尋ね者の熊は撃たれた。

外輪山の斜面をもんどり打って、谷底深く彼は墜ちて行った。

そして灌木の茂みに引ッ掛かり、

もう観念したといふ風に手足をひろげた。

バンザイした掌から、ころころ青い寶石が、

いや、一粒の貧しい顆実がころがった。

それは彼のつぶらな眸に似てゐた。

とどめを刺しにやってきたとき、

猟師は思はず何者かの視線に身構へた

瞳みまかれた火口湖ふかく ゆっくり 雲が動いてゐた。

夜明け前

カンテラの明かりに照らし出された

ほんの短い足許をみつめながら

石くれをふみくだく自分の聲音だけを聴きながら

山頂へ向かって続く 夜明け前の山道をぼくは登ってゆく

カンテラの小さな視野は

世に蒙^{くら}い自分のやうにうろろしてゐる

無益な石標がきまぐれにあらはれて ぼくをはげます

その意味がむなしく頭の中で空回りする

踏みしめてゐるのは 星屑なのか

ぼくにわかるのは たよらないこの道が

夜露に濡れて どこまでもつながってゐるといふこと

稜線上の まだ暗い星空を仰ぐひととき

巨大な過去に抱かれる錯覚に ぼくは立ちすくむ

へびつかひ座が 恢^{おほ}きなく首飾りをまはさうとする

ここに収めたのは、過去に刊行した二冊の詩集とその後の拾遺詩篇で、ほとんどがもう十五年以前の作品である。これが「四季派詩人」として生きた著者の作品のすべてである。

先師田中克己先生を始め、伊東静雄、木下夕爾、立原道造、宮澤賢治や日夏耿之介等々、私淑した先達詩人を身近に感じながら詩を書いてゐたその頃の私は、仕事柄、戦前の東京資料にもまた馴染む機会が多かったことから、目の前の風景を意識的に捨象して、想像された仮想現実としての昭和初期の世界に、半分足を突っ込んだやうな精神状態のなかで生きてゐた。下宿のあった田端は「文士村」であり、古老が持ち込む寄贈品にあふれ、「もの売り」の声が生かすで流れてゐた職場の下町風俗資料館は、生計を得る仕事場といふより、ピント外れの若者が精神を充電するための「タイムマシン」と呼んだ方がよい所

だった。毎晩通った神保町の古本屋はもとより、那須火山帯や霧ヶ峰高原など、気ままな単独旅行にあげくれた貧しい文学青年時代の行動半径を、私は今、限りない愛惜を以て回顧することができる。それは現実とは別に私の心の中だけに巣喰つてゐた、詩的に存在する戦前日本の風景、その青春の彷徨地図に他ならなかった。

その後帰郷した私は、岐阜女子大学に職員として奉職することで生活に安定を得、先師の詩業をまとめる仕事を通じ、詩の実作よりも、世間に知られてゐない昔の詩人達を、当時の詩集Ⅱ原質によつて祖述することに意味や意義を見出すやうになつていった。活動場所を、普及しはじめたインターネットに移し、今では、この地元で盛んだつた江戸時代の漢詩にまで遡つてゐる。親愛は漢詩そのものに対してといふより、日本の古い知識人のつましい暮らしぶりに、といった方がいい。さうしてやがて、私は「戦前四季派と戦後現代詩との関係」が「江戸後期漢詩と明治新体詩以降との関係」と、時代を異にしながら位相を同じくする断絶の関係にあることを知るに至つた。これまで乖離してゐた二つの関心事、戦前抒情詩と江戸漢詩とが自分の中で繋がつた瞬間であつた。また江戸時代の知識人が拠つた教養といふ観点から、私は先師の古典文学の蘊蓄に近づく動機づけを、遅まきながら持つことができるやうにもなつたのだつた。

先師は、詩的系譜に於いては、敗戦後にアプレゲール詩壇から政治的に切り捨てられた詩人であったが、漢詩文に対しては、従来の訓読学と縁を切って歩んだ新進学者の一人だった。私は斯界と無縁で、その世代交代劇とも関係ない時代に育ったが、つまりは敗戦後の日本に鼓腹撃壤した無用者詩人の末輩として、無用之長物といふにも当らぬこれらの作物を総括して大仰に長嘆息してゐる無能の詩人にすぎない。前の二詩集は戦前詩人の生き残りの先輩方に読んで頂きたいがために編んだが、今回は私生活のけじめをつける意味を込め、記録といふ気持で制作進行を眺めてゐる。体裁を、不肖の弟子がかつて編んだ先師の詩集の装釘にそっくり倣ふにあたっては、アドバイスと許可を賜った「四季」ゆかりの潮流社八木憲爾会長に深甚の感謝を申し上げるとともに、二冊並べたところを、昨年みまかられた先師の詩友、杉山平一先生に一瞥頂けなかった憾みをかみしめてゐる。ただし杉山先生は現在の私の歳からさらに半世紀近く、家族を守りながら第一線で詩作を続けられた。それを思ふと人生の節目云々を嘯いてゐる自分が恥しい。人には歴史的仮名遣ひを徳憑しながら、促音便や漢字は現代に妥協してゐる、そんなスタンスの節操を情けなく思ふこともある。手にとられた方に感想は一任したい。

二〇一三年三月朔日

著者識

限定刊行300部

中嶋康博詩集

二〇一三年五月二十四日印刷

二〇一三年五月三十一日発行

著者 中嶋康博

発行者 八木憲爾

発行所 株式会社潮流社

一〇五〇〇〇四 東京都港区新橋二五五

新橋二丁目MTビル

頒価 一五〇〇円

ISBN978-4-88665-101-3